

## 小鵜飼船に寄せられた青苧と木綿 —最上川から見た商品経済進展のダイナミズム—

池本 正純

### <プロローグ>

#### 1. 最上川舟運の開発

- 1) 最上川流域と運送された品物
- 2) 最上義光による河川整備
- 3) 最上川舟運の拠点大石田河岸
- 4) 西村久左衛門による河川整備

#### 2. 日本海航路の役割

- 1) 敦賀・琵琶湖ルート
- 2) 羽州城米と藩米における課題
- 3) 河村瑞賢による海路の整備
- 4) 北前船の出現

#### 3. 最上川流域の商品流通の発達

- 1) 「紅花大尽」—尾花沢村の豪商鈴木清風—
- 2) 川舟運送をめぐる争い
- 3) 「商人たちの湊町」酒田
- 4) 「舟人馬かた鎧屋の庭」

#### 4. 青苧から木綿へ—商品経済進展のダイナミズム—

- 1) 青苧とはなにか
- 2) 木綿の登場
- 3) 木綿生産の専門化・分業化・集中化
- 4) 木綿の普及がもたらす商品経済化のダイナミズム
  - (1) 魚肥の市場の拡大
  - (2) 染料としての藍・紅花の需要の増大
  - (3) 古手の役割
  - (4) 「男はわら仕事、女は木綿」
  - (5) 廻船業の発達
  - (6) 最上川流域と商品経済化

### <エピローグ>

## <プロローグ>

昨年の Part 1 に引き続き、今年も「北前船の足跡をたどる」Part 2（秋田～山形～新潟）に参加させてもらった。3日目、9月5日の午後、酒田での調査・見学の締めくくりは山居倉庫であった。倉庫と目と鼻の先の川岸に、小さな舟が小屋に納められているのが目に入った。近づいてみると「小鵜飼船（こうかいぶね）」の復元とわかった。脇に説明の立札がある。

小鵜飼船は最上川舟運において物資の輸送をするために作られた船です。慶長6（1601）年に山形藩主となった最上義光は、難所の開削や河岸の設置によって最上川舟運の整備を図りました。最上川本流に就航する 250 俵積み4人乗りの「鵜船（ひらたぶね）」に対し、この小鵜飼船は支流や船着場間の近距離輸送に使われ、積載量は 50 俵程度でした。最上川の上流松川（現在の米沢市の流域）に小鵜飼船が登場した時代は元禄年間といわれています。長さは約 13～15 メートル、幅は約 2 メートルで、前方に帆をかけて風を利用し、舳先がとがった流線型をしているためスピードもあり、川幅の狭い支流では重宝がられました。上り船では、塩、砂糖、海産物、木綿、茶など、下り船では米、紅花、青苧、大豆などが運ばれました。上りには2週間程度、下りは4～5日かかったと伝えられています。

この舟は、最上川・川舟保存会の熱意により製作（舟大工 大石田町木村成雄氏）され、往年の船運で活躍した当時をしのび、この地に展示したものです。

参考文献 「最上川舟運と山形文化」横山昭男氏

ちなみに、この復元された小鵜飼船に帆は見えなかった。小屋におさめるためであろう。鵜船は4人乗りであるが、これは3人乗りである。鵜飼船には文字通り鵜飼に使う船の意もあるが、ここでは近世の河川水運で使われた高瀬舟系の川舟を指す。船首形状が似ているための呼称で漁の鵜飼とは関係がない。各地の河川にあったが、その船型・構造には就航河川によって多少の相違がある。小型のものは小鵜飼船と呼んだ。江戸時代、最上川では左沢（あてらざわ）より上流で使われたが、明治時代になって下流でも使用された。小鵜飼船も鵜船も、舵はなく櫂や帆で進み、急流を上る時には岸から綱で引く。([9]、[10]、[12])

上の立札を読んで思ったのは、北前船の有数の寄港地である酒田の背後に控える最上川流域の人々の農業と暮らしである。北前船の海の航路はたしかに大動脈であるが、寄港地の背後には毛細血管のように河川でつながれた後背地が控えている。酒田はその結節点である。海の航路と河川の舟運とを統合して捉えて初めて、全国的な規模で進展していた商品経済(市場経済)

の構造が理解できるのだと気づいた。

川舟で運ぶ対象になっている産物は、最上川流域の農業や暮らしの特徴をうかがい知る手がかりであると同時に、この地域と全国との経済的つながりを理解するキーワードでもあろう。ただ、よくわからないものがあった。青苧（あおそ）である。先に訪問した酒田市資料館でも実物を見、旧鎧屋（あぶみや）でも取引される商品の一つとして耳にしたものだ。繊維原料で最上川流域の特産物であるらしいが、どれほど重要な産物なのか想像がつかなかった。珍しいどちらかと言うとマイナーな繊維なのだろうと思った。だが、調べてみて驚いた。青苧は古代から近世に至るまで長いあいだ日本人のもっとも重要な衣料原料であった。戦国期から近世になってそれが木綿に取って代わられたのである。江戸時代はその革命的变化が進んだ過渡期であったのだ。それは同時に全国的に商品経済化が進展するプロセスそのものでもあった。

そのプロセスの断面図が小鵜飼舟に象徴的に映し出されていたのである。上り船の木綿と下り船の青苧は、ともに衣料の原材料ではあるが、近世日本の商品経済発展のプロセスを具体的に語る上で欠かすことのできない重要な産物であり、商品であった。しかも紅花は繊維の染料として使われるのでこの物語に深く絡んでくる。米、塩、海産物などを含め、最上川を小さな舟で上り下りしたこれらの産物が、地域を越え商品として流通していったところに北前船航路と最上川舟運との結びつきの重要な意義が浮かび上がってくる。

## 1. 最上川舟運の開発

### 1) 最上川流域と運送された品物

最上川の流域ごとに運送された品物にも微妙な違いがある。酒田市立資料館の展示図に以下のような説明があった。山居倉庫にあった鵜飼舟のそばの立札の内容よりも詳しい。(展示された地図上に地域の明記はないが表記された位置から類推は可能である。庄内地方は最上川河口に近く、酒田が含まれるので省かれている。時代としては最上川舟運が盛んとなった江戸時代を想定していると思われる。地図 p.6 を参照されたい。)

<最上地方>

出一米、べにばな、青そ、真綿、ろう、うるし、大豆、小豆、葉タバコなど

入一塩、くりわた、干魚、古手、砂糖、茶、陶器、雛人形、日用品など

<村山地方>

出一米、大豆、べにばな、小豆、青そ、真綿、葉タバコなど

入一塩、魚、古手、雛人形、日用品など

<置賜地方>

出一米、青そ、うるしなど

入一塩、日用品、干魚など

品物の挙げられている順番に意味があるのか（例えば、量や金額順）は不明である。出て行くもの（川を下るもの）はほとんど農産物（米、大豆、小豆、）であり、農産物からの半加工品・中間製品（青そ、べにばな、真綿、ろう、うるしなど）である。

米の多くは年貢米として運ばれたであろうが、商人荷としても運ばれた。真綿は屑繭を煮沸し精練した後引き広げたもので、軽くて保温力が大きい。綿入れなどの防寒衣類の中入れや寝具などの引綿に用い、紬糸の原料にもなる。最上川流域で養蚕が行われていたことが分かる。しかし絹織物としては移出されていない。

紅花には黄色と紅色の二つの色素が含まれており、黄色の色素は水に溶けやすい性質があるため取り出しやすく、庶民の染物として利用された。紅色の色素は取り出しにくく熟練した技術が必要であった。紅染は高貴な人しか着ることを許されず、京都の西陣織のような高級な着物にだけ使用された。さらに口紅・頬紅用の紅は高値で取引され、ごく一部の富裕層が使用していた。「小町紅」というブランドがあったという。酒田市立資料館では、半加工の段階の「紅餅」の実物が展示されており、このような中間品の形態で取引されていたと思われる。

青苧（あおそ）とは、苧麻（ちよま）あるいはからむしと呼ばれるイラクサ科の多年草からとる繊維のことで、茎の荒皮を剥いで水にさらし細かく裂いた繊維を束にしたものが取引される。酒田市立資料館にそのひと束が展示されている。

入ってくるもの（川を上ってくるもの）は、すべてこの地方でとれないものである。雛人形は地域の豪商が注文して京都から運ばせたものであろう。注目すべきは「くりわた」と「古手（ふるて）」である。繰り綿は、綿の実（綿実・めんじつ）を綿繰り車にかけて種子を取り除いた段階のまだ精製していない綿のことである。この地域では綿花栽培が行われず、半製品として繰り綿がどこかから仕入れられていたことが伺われる。古手とは木綿製の古着のことである。京都、大坂など上方から移入したものであろう。反物だけでなくこのくり綿と古手を含めて、山居倉庫の立札では木綿と一括して表記されていたものと思われる。

最上川で運ばれた品物について、もう少し詳しく歴史家の記述を見てみよう。

「米穀以外の特産物が最上川を下り、上方に移出されたのは年貢米とともに古い。・・・寛永元年の新庄藩の記録にも大豆・荳油・漆・紫根・茜がみられ、村山地方の青苧・紅花も、中世以来の伝統的工業の中心たる奈良・京都市場へ移出されたと思われる。」（横山昭男 [2] p.75）

「米・雑穀以外で最上川を下して酒田から上方向け移出する商品は、近世初頭から栽培された村山地方の特産物、紅花・青苧・真綿・蠟・漆が中心で、その他荳油・胡麻・水油・紙・葉

煙草などがあつた。・・・これら特産物の中でも量的には雑穀・大小豆が最も多いが、全国的な名産であり高価なものは、何と言っても紅花・青苧である。」〔2〕 p.91)

次に移入品(最上川を上った品物)については「天和3年(1683)の庄内藩の覚書によると、播磨塩、大坂・堺・伊勢の木綿類、出雲の鉄、美濃の茶、南部・津軽・秋田の木材、松前の肴である。」〔2〕 p.92)

最上川流域の全国との経済的つながりは、米穀・雑穀および畑地の特産物を主な移出品とするところにその特徴があるが、ほぼ原料供給の段階に留まっているとこの歴史家は言う。どちらかといえば、ネガティブな評価である。この点は4.の4)の(6)に紹介する永原慶二氏の評価と比べると興味深い。

## 2) 最上義光による河川整備

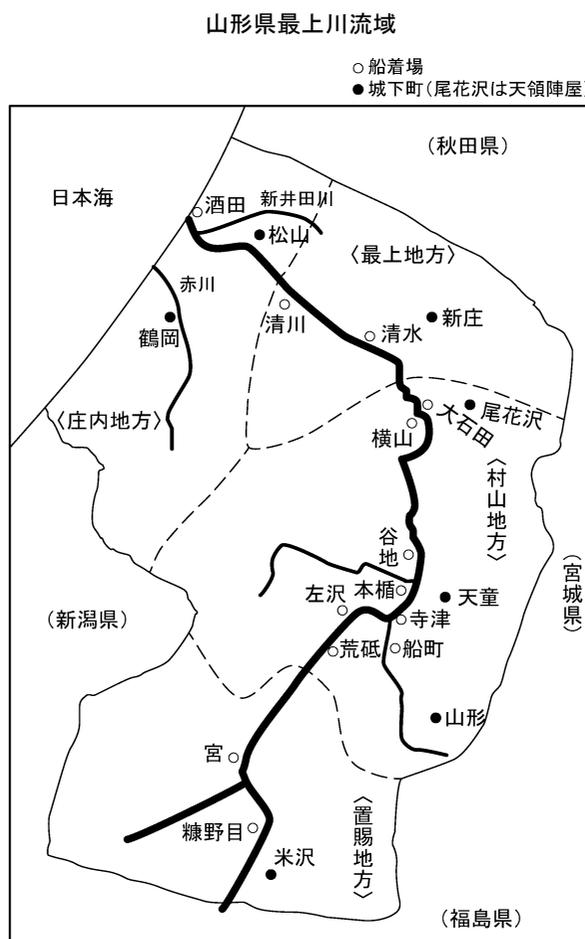
最上川は長大な川であり、上、中流部の盆地に米や雑穀の穀倉地帯が控えている。重量物資の輸送に有利な水運を開き、年貢米を運ぶことは領国経済にとって重要な課題であった。近世初頭(慶長末年から元和期にかけて)、最上川流域を一円的に支配した山形城主最上義光(もがみよしあき)は、最上川の難所(三難所と呼ばれる碁点・三ヶ瀬・隼で、岩塊が川面に露出しているところ)を開削して、船町から酒田へ船を通し、酒田をはじめ清川、大石田の川港を整備した。それまで最上川舟運は、酒田から清水までは大船を用い、清水で一旦中揚げし、そこから上流用の小船に積み替える「中継ぎ」という制度により行われていた。開削工事から10年後、清水氏を滅ぼした最上氏は、川舟の中継地点を清水から大石田に移した。清水では運賃の十分の一役銀を徴収することになった。

「最上川舟運の発達は、近世初期に村山から庄内にわたる領国を形成した最上氏の開削と統制にその画期が見られる。その頃から、近世期を通して中継河岸として最大の大石田は、荷物積替えや船継河岸としての重要性を増し、川舟の造立も盛んになった。その後輸送物資も多くなった寛永末年から慶安期には、のちの舟運秩序および統制の基本の一つとなる酒田船と大石田船による上り・下り片運送のとりきめ、運賃十分の一の荷宿取立、および最上川三河岸と言われる清水・大石田・船町の河岸体制ができるのである。」〔2〕 p.18)

## 3) 最上川舟運の拠点大石田河岸

大石田は室町時代から商業が盛んで流通も活発なところであったと言われる。戦国時代、井出館の館主大田左仲(おおたさちゅう)は、現在の四日町地内に定期市として三齋市(毎月4日、14日、24日)市場を開設し、取引の活性化を図ったという。関ヶ原における東軍の勝利により、山形から酒田まで全域が領地になった最上義光は、内陸から庄内を結ぶ舟運ルート

定に際し大石田に着目し、村山地方の年貢米等の物資を酒田に運ぶ重要な河岸として大石田を「町立て」(都市計画)したのである。([11] 参照) 酒田から大石田まで積替えなしで直接運ばれるようになり、大石田で上流用の小舟に積み替えることとなった。大石田は酒田大型船が通航する上限となり、山形と酒田を結ぶ川舟中継河岸であるとともに、羽州街道を陸送する物資の陸揚げ・積み出し河岸でもあって、交通の要地として栄えることとなった。大石田から大淀(村山市)の間にある集落では、瀬を上る船を陸上から引く「引船」の夫賃で生計を立てる家も多かったという。([9] より)



注：横山昭男『近世河川水運史の研究』吉川弘文館 1980、p.21 を参照して描いたもの

#### 4) 西村久左衛門による河川整備

最上川舟運を語る上で、米沢藩京都御用商人・西村久左衛門を欠かすことはできない。最上

義光は山形から酒田までの舟路を開いたが、西村は米沢から左沢（あてらざわ）までの舟路を開いたのである（山形と米沢は最上川上流に位置するが、異なる支流にある）。彼は、米の輸送に苦勞している米沢藩に対して、松川で船が通れない黒滝の難所（荒砥と左沢の間に位置する）を開削すれば、米沢から酒田までの水路が開け、藩の利益は莫大なものになると申し出たが、財政難を理由に断られた。結局、彼は独力で河川整備を行うことを決断する。元禄5年、最上川筋関係の諸藩・代官に工事を願い出て、元禄7年には米沢藩蔵米の酒田經由江戸輸送を行っている。約2年のうちに黒滝の開削は完了したことになる。この時、糠野目、宮、荒砥の三河岸が設けられ、酒田までの舟運が可能になった。（〔9〕、〔10〕より。地図参照。）

## 2. 日本海航路の役割

### 1) 敦賀・琵琶湖ルート

律令制時代の延喜式には諸国の貢物を奈良・京都に運ぶルートが定められていた。北陸道（北国）は船で越前敦賀まで海上輸送し、敦賀からは馬に乗せて琵琶湖畔の塩津に陸送し、ここからは湖上を船に積み替えて大津に送り、大津からまた馬に乗せて都に陸送することになっていた。（牧野隆信〔1〕 p.23）

大化改新後、中大兄皇子を中心とする政府が国内体制を固めるために行った蝦夷征伐において、海上から進んで越後・出羽を制圧しさらに遠く北海道まで及んだが、その水軍の前身基地は能登半島であったという。7、8世紀にはすでに北陸から東北にかけて何らかの海上交通は開かれていたと推測される。（〔1〕 p.25）

平安中期以後、律令制の崩壊は著しくなる。地方の開発領主は公租を免れようと貴族や寺社にたのんで荘園を盛んに寄進した。荘園の現地から京都の権門勢家に貢租を運送するのにやはり舟運は用いられたが、経済の自由な交換行為に基づく商業取引とは異なり物流は活性化しない。「それは一方的な収奪に過ぎず、また貴族の側でもあまりに運賃の高くつくものは運ばせず、重量の軽い運送に便利なものに限って運ぶようにしていた。したがって東北地方の米などは、久しく運送の対象とはならなかった。」（〔1〕 p.28）

頼朝が鎌倉幕府を開くと、諸国の公領・荘園に御家人を地頭として配置し国ごとに守護を置いた。貴族や寺社の所有する広大な荘園に武家の勢力を扶植することになり、荘園制は次第に弱まる。鎌倉後半になると、在地領主層の力が強くなり、本所である京都の貴族や寺社との間に紛議が絶えなくなる。その解決策として荘園を分割する下地中分や年貢を地頭が請け負う地頭請が起り、貴族や寺社の荘園に対する支配力は次第に弱められていった。

足利尊氏が慶応3年に始めた半済法は荘園の年貢を半分しか納めないことを認めたもので、

莊園制の崩壊に拍車をかけた。「こうした傾向は莊園から京都に年貢を納入しても、なお現地に多くの収穫物を残すこととなり、これらの余剰物資が商品として地方商人に売り出され、商人はこれを京都で売るために輸送するようになる。こうした商品が次第に多くなり、年貢と並んで、あるいはさらに年貢を凌いで増加するようになると、各地の廻船が活躍することになる。・・・このような莊園制の崩壊傾向による商品の流出と、貨幣経済の進展が相まって、鎌倉後半から室町にかけては商品の運送—それに伴う海運の発展を見ることができる。」([1] p.29)

「秀吉の登場により、鎌倉後半から商品流通を促していた地方の余剰物資は、莊園制の崩壊、交通障害の除去、樂市樂座、都市育成によっていよいよ活発に動くこととなった。久しく期待されなかった越後以北の東北地方の米も大名の分国（領国）発展策から都に積極的に回漕するよう考えられ、末吉（平次郎）ら上方商人に船を依頼したのである。ただ、いまだ東北から一気に瀬戸内に回漕するまでには至らず、敦賀・小浜に揚陸するものが多かった」([1] p.37)

幕藩体制初期でもなお敦賀・琵琶湖ルートは健在であり、敦賀（ついで小浜）の地位は他港に抜きん出ている。この北国海運は、北陸の豪商である廻船問屋が独占的に経営するところであったが、そこにやがて下関・瀬戸内海を経由して大坂まで直送する（いわゆる西回り海運を行う）西国船（上方や瀬戸内海の廻船問屋、とくに塩飽船）が進出してきた。敦賀港関係商人には打撃となった。敦賀入津量は以前（寛永期）の三分の一に減少したという。北国諸藩の諸物資の多くが西廻りによって大坂入津になっていった。戦国および近世初期における港町豪商が幕藩制的商品流通の確立期に没落していく一つの例とされる。（横山昭男 [2]、第1章、第1節）

## 2) 羽州城米と藩米における課題

17世紀前期における最上川輸送物資の大宗は幕領・私領の年貢米であり、領主的御用荷物であった。「近世初頭における羽州城米の大部分は、地方的中心市場たる港町酒田で販売するか、あるいは近辺の幕府直轄の鉱山で大量に消費されるのが普通だったと考えられる。鉱山都市の人口は極めて不安定であるが、寛永期を全盛時代とする延沢銀山は、2～3万を越す消費人口に達したのではないかとみられるが、その食糧は、幕府諸藩の年貢米販売によって始めて賄い得たであろう。しかしこの銀山も、寛永末・正保期以降衰退に向かい、寛文期には三分の一以下に縮小し、やがて廃山になるのである。」（横山 [2]、p.74）尾花沢の延沢（のべさわ）銀山の繁栄による銀山関係物資の移出入が江戸初期の大石田河岸を活気づけることにもなった。（[11] より）

銀山の縮小とともに城米の江戸輸送の試みが始まる。城米輸送は万治2（1659）年以来、江戸商人の請負制とした。しかし、新井白石が指摘するように、これには一つ問題があった。廻

船商の入札で運賃が安く確実なものを選ぶが、商人はその安運賃を雇船、水夫に転嫁し安給料で間に合わせるということになるので、多くの破船を免れることができなかつたという。([2] p.58) 江戸で大量の米を必要としている幕府にとって、陸奥の伊達・信夫の二郡、出羽の置賜・村山・庄内における幕領の城米を、いかにして安全有利な方法で江戸に輸送するかが喫緊の課題となっていた。

また、羽州各藩においても年貢の蔵米を中央市場である大坂に安全有利に運ぶことは共通した課題であった。庄内藩は御手船（自前の船）の建造によって蔵米の大坂廻送を試みたが途中で挫折している。原因は御手船の破損であった。([2] p.50)

### 3) 河村瑞賢による海路の整備

幕府の御用商人である河村瑞賢が幕命を受け、酒田から大坂・江戸への航路（西廻り航路）の整備に乗り出すのは、このような状況下においてであった。西廻り航路に先立って瑞賢が整備した東廻り航路は、阿武隈川河口の荒浜から房州を下り下田または三崎を経て江戸に入るコースである。この航路は距離的には江戸に近いけれどもあまり発展しなかつた。それは江戸へ米を送るだけで、帰り荷の量が少なく営業的に価値が乏しく、その上危険だったからであるといわれる。(牧野隆信 [1] p.45)

瑞賢による航路整備とは具体的には、酒田に幕府直営の城米倉を設置し、以後の寄港地を佐渡の小木（おぎ）、能登の福良（ふくら）、但馬（たじま）の柴山、石見（いわみ）の湯泉津（ゆのつ）、長門の下関、大坂、紀伊の大島、伊勢の方座（ほうざ）、志摩の畔乗（あおり）、伊豆の下田とした。それら各地には見張り役人をおき、途中の要所には毎夜烽火をあげて船の目標とさせた。([1] p.45) 重要なのは、これまでの町人請負を廃して幕府直廻しとしたことと、船と船乗りを讃岐の塩飽のものを多く用いたことである。それは何よりも日本海で北国船を駆逐した実力を買ったのである。瀬戸内を熟知し、船は「完堅精好」で技術も他の商船に比べてはるかに優れていたからである。瑞賢の建議は、時の海運の実態と趨勢をよく見定めた上でのことであった。(横山昭男 [2] p.52) しかし元禄以後は、幕領城米も塩飽独占から入札請負制となり、自己運送者ではなくて賃積船が一般的になってくる。([2] p.54)

ちなみに、天領年貢米を大坂や江戸に運ぶことを託された船には「御城米」と大きく書かれた旗幟が掲げられた。この「通船旗」があれば、どこの港でも「天下御免」であったという。(酒田市立資料館にその旗幟が保存されている。)

河村瑞賢による西廻り航路の刷新は、年貢米の輸送に多大な貢献をしただけでなく、海路を通じた様々な物資や商人荷物の輸送にも役立った。そしてさらには、最上川の舟運の発展にも貢献したのである。河川の水運と海の航路とは相互に密接に関係している。じつは、瑞賢は西

廻り航路整備の事前調査の際、酒田の前にまず最上川河岸の最大拠点である大石田を訪れ調査を行なっている。瑞賢父子を含め総勢54人の大部隊であった。村山地方の幕府領年貢米の輸送実態と大石田河岸での運賃等を詳細に調査したという。大石田河岸は村山地方の幕領城米輸送の起点として位置付けられ、その後、商人荷物の増大と相俟って大いに賑わうことになる。（[11]より）

寛文期の幕府による西廻り航路の整備に刺激され、最上川の輸送物資も急速に増大した。城米や諸藩の蔵米だけでなく、商人物では米・大豆のほかに最上川流域の特産物である紅花・青苧・蠟なども増えてくる。

#### 4) 北前船の出現

北前船の起源は蝦夷の海産物を北陸に運んだ「荷所船（にどこぶね）」だといわれる。蝦夷地を支配した松前藩は、米がとれないので、家臣たちには地域ごとにアイヌとの交易権や漁業権を俸禄の代わりとして与えた。ただその交易品や海産物を金に換える必要からこの仕事を商人に委託するようになり、ついには一定の金額で請け負う「場所請負制」が生まれてくる。この役割を担ったのが近江商人であった。（牧野隆信 [1] p.41）この近江商人たちは、出身が琵琶湖畔薩摩・柳川の両村であったので両浜組という仲間組織を設立したといわれる。その後八幡村の商人も加わることになるが組織の名前はそのままである。両浜組商人が場所制度を利用して内地へ送る荷物は「荷所荷（にどこに）」と呼ばれ、それを運ぶ船は「荷所船」といわれた。利用港としては近江に近い若狭の小浜、あるいは越前の敦賀が用いられた。また船として、越前や若狭・加賀・能登など北陸出身の船主のものが用いられた。（[1] p.42）このように、北海道一敦賀一大津という流通ルートで18世紀の北海道産物は畿内に運ばれた。（中西聡[6]p.10）

「当初は、漁獲物は荷所船で運ばせたが、両浜組商人の減少とともに荷所船が運ぶ積荷の量が減ると、両浜組と荷所船の雇用関係が不安定になり、荷所船主は両浜組から離れて、自ら買入れた商品を輸送して販売する買積経営を行うようになった。それに対し住吉屋（両浜組商人の一人）は、自身も船を所有し自分の船で場所産物を敦賀・大坂・兵庫に運んで取引するようになった。」（[6] p.11）つまり、荷所船も両浜組商人もそれぞれが北前船に変身していったのである。

しかしすでに、2の1)で触れたように敦賀・琵琶湖ルートは下関、瀬戸内を經由して直接大阪へ送る航路によってやがて侵食されていく。下関經由の方が運賃は安く、大坂で売の方が大津で売よりも米価が有利であったという試算がある。日本海側の各藩の回米実績がそれを物語る。（牧野 [1] p.43-44）この傾向に拍車をかけたのが、瑞賢による西廻り航路の整備であった。西廻り航路のほうが安全・確実にコストが安くなったのである。

「従来蝦夷地と敦賀・若狭を結んだ荷所船と、北国の年貢米を大坂に運ぶ幕藩の輸送船とは、本来違った性質のもので、一つは民間経営、他は官営のものではあるが、西廻り航路の整備によって航海が安全とすれば、両航路の結合はきわめて自然である。そのうえ、近江商人は蝦夷地産で中国に輸出する干鮑（ほしあわび）・煎海鼠（いりなまこ）などを長崎に回漕したり、あるいは各地へ古着や綿を回漕する者もあったから、蝦夷地―北陸、北陸―大坂のコースはスムーズに結合し、官営の年貢米のみでなく、民間の生活や産業の需要に応ずる北前航路が出現したのである。」（[1] p.48）

この時代、蝦夷地と大坂とが商業的に結ばれる一つの大きな必然性があった。それは西日本における木綿・藍・菜種などの栽培農業の発達による魚肥の需要増大である。はじめ最も多用されたのは、干鰯（ほしか）で、房総半島で多く生産された。しかしその供給が頭打ちになる。そこで蝦夷地で大量に産する鯨が注目されたのである。沿岸で漁獲された鯨の大きなものは、身の部分は裂かれて身欠きニシンとして食用にされるが、残りの背骨と頭部・腹部が胴鯨として肥料に用いられた。また小さめの鯨は釜で煮られ、油分と水分が搾り取られた残りが粕として肥料に用いられた。西日本で魚肥は高く売れる。一方、蝦夷の現地では鯨は安く手に入る。まさに未利用の眠れる資源であった。この地域的な価格差が商業にとって絶好の機会となるのである。北前船の活躍した最も重要な舞台である。

「北前船は幕藩体制の整備、商品経済の全国的発展をバックにして、ユニークな経営のもとに、近江商人の船乗りから独立して江戸後期には隆盛期を迎える。特に蝦夷地のニシンが、畿内や瀬戸内の農業経営に不可欠の要素となり、逆に瀬戸内の塩や各地の米が蝦夷地の海産物の処理や住民の生活上の必要物資として、互いに補完関係を結ぶようになった」のである。（[1] p.16）

北前船は当然酒田にも寄港し、最上川流域でとれた米や特産物を上方に運び、また上方からは塩や木綿類を運んできた。水運に詳しい歴史家は次のように総括する。

「寛文・元禄期の水運を通じてみた商品流通の発展は、まず城米・私領米の最大限の大坂・江戸中央市場販売が確立したこと、同時に地域的分業の発展・深化によって、大量の民間商品が流通したことにその特色が見られる。このことは上方・瀬戸内地方のこの時期の産業の画期的な発展にも照応する。例えば大坂周辺の棉作は、肥料としての干鰯・油粕を多量に使用し、周密な土地管理のもとに、畑方のみならず田方にも、稲作を圧倒して不動の地位を固めたのは元禄頃であったといわれている。また瀬戸内の十州塩業は、揚浜塩田から入浜塩田への本格的な開発が進み、九十九里浜における大地引網鰯漁業が展開したのもほぼ同じ時期の寛文から元禄・正徳頃であった。これが、西廻り海運の発達と西国商人の北国地方進出を起動力として、まさに全国的な市場を発展せしめたとみることができる。」（横山昭男 [2] p.94）

しかしこの総括の段階では、木綿の生産拡大が魚肥の需要増大をもたらし、それが最終的に北前船の活躍する蝦夷地の鯨にまで及ぶことは視野に入っていない。また、木綿の普及が藍や紅花といった染料の商品化に結びつくことも意識されていない。あくまで「時期としての照応」の指摘にとどまる。この点は4.の4) で述べる。

### 3. 最上川流域の商品流通の発達

#### 1) 「紅花大尽」—尾花沢村の豪商鈴木清風—

紅花は今では山形県の花にも指定されているが、置賜・村山地方では古くからの特産品である。気候的に紅花栽培に適し、上方からの需要も強く近世に栽培が盛んに行われた。元禄の頃には盆地内の全畑地の三分の一が紅花畑であったと言われる。この最上紅花を京都に送るため、河岸の大石田まで羽州街道を車馬で陸送、大石田から酒田まで最上川を下り、酒田から海船で敦賀の港に至り、再び湖船に積んで大津まで運び、京都に車や馬で運んだと言う。この紅花生産の発達は紅花商人に多大な利益をもたらした。それが「紅花大尽」である。代表的なのは尾花沢村の鈴木清風である。([10] より)

「鈴木家は寛文・元禄期に急速に成長した在郷町豪商である。彼の成長した尾花沢地方は米・雑穀以外に特産物商品生産はほとんどなく、むしろ最も低生産力地帯に属する。そこに台頭した鈴木家の発展の条件は何であったろうか。寛文以後、とくに元禄期の最上川水運による移出入物資は急速に増大したが、それは畿内・瀬戸内地方の古着・繰綿・小間物・塩を中心とする、より地域的分業に基づく加工品が、農村一般に流入し、一方その引替えに、米・雑穀・および特産物を移出するいわゆる買継商人としてであろう。・・・大石田が最上川の要地であれば、その背後の尾花沢は羽州街道の要衝であり、鈴木家はかかる地の利を得ていたとすることができる。」(横山昭男 [2] p.106)

元禄期に大石田周辺で豪商が輩出したが、「彼らは、とくに集荷問屋として、寛文期以降著しく増大してきた一般庶民向けの移出入物資の保管・販売・運送業によって急速に成長したのである。しかしその元禄期の河岸商人の特質は、庄屋・船肝煎など領主的権力の末端機構の地位を占め、領主財政に密着しながら一方高利貸・買継商人として豪勢をみたまものと考えられる。」

([2] p.100) その典型と考えられるものが鈴木八右衛門(俳号清風)であった。鈴木家は元禄11年(1698)、白河藩および秋田藩の江戸蔵元を、江戸商人井口久左衛門とともにつとめている。出羽の尾花沢に本拠を置きながら、両藩の有力な御用商人を勤めるという地位にあった。しかし、享保年間以後急速に衰え、天保年間には元禄期の隆盛ぶりを完全に失っている。

## 2) 川舟運送をめぐる争い

最上川流域の諸藩は大量の蔵米の輸送を有利に行うために町船に依存するだけでなく、手船（自前の船）の造立・所有を試みたことがあるが、町船側の抵抗に遭い成功しなかったことがある。（横山 [2] p.107）深刻なのは酒田船と大石田船との利害対立である。大石田船と酒田船との間で運送荷の取り合いが起こるようになったため、幕府城米・各藩領蔵米・商人荷の優先順位で川下げをする法が定められ、慶安3年（1650）、商人荷は上りが酒田船、下りが大石田船という片運の慣行（古法）が成立した。（[2] p.108）しかし、戻り船に積荷しないというのはもともと無理がある。運送の効率から見て不合理である。事実、この協定にも関わらず、戻り船でひそかに安い運賃で積み込む「差し荷」が横行した。酒田では町奉行が川舟業者を三組に分け、組頭を置いて積荷の順番を厳しく取り締まり、不正を監視させたが、このような問題は、商品流通の増大が進む中で新規商人が台頭していることが背景にある。

また酒田では、問屋仲間ではないものが不法の口銭・蔵敷徴収によって荷物を取り扱っているため問屋は迷惑しているとし、酒田大問屋 42 人・小問屋 30 人は連名で問屋員数の定めを明確にしてほしいとの請願が出される。それに対し新規商人 23 人が、問屋員数の定めの際は、小問屋仲間に加えるよう嘆願した。庄内藩は吟味の結果、現に荷物人宿を経営する新規願人 19 人を小問屋仲間へ加入させ、計 91 人の問屋株仲間を成立させた。この新規商人台頭の背景には、最上川流域の商品流通の発展と流域商人の成長とがある。（[2] p.114）

「最上川水運は、寛文から元禄期に著しい発達を示したが、酒田一大石田、酒田一上郷間を往来する艀船は、酒田と大石田船が完全に独占していた。輸送物資の主たるものは、領主的荷物として公定運賃による城米・私領米と相対運賃の商人荷物とがあつたが、後者については酒田・大石田船間で、上り荷と下り荷の片運送の協定があり、河岸の中では、最上特産物の川下げ輸送を独占する中継河岸大石田の発達は顕著であつた。ところが、酒田・大石田船間の協定違反をめぐる紛争は初期以来たえず繰り返され、元禄末期以後さらに新たな抗争が発生してきた。」（[2] p.18）

重要なのは、最上川輸送における上郷商人の動きである。これまで酒田一山辺間の登せ荷物は、酒田船が大石田まで送り、そこから大石田船で船町まで上り、そこで荷揚げして、船町から山辺までは駄賃送り（馬で運ぶこと）としていた。ところが山辺村の吉兵衛荷船が従来の慣行を破り、大石田より山辺まで直積通しにしたことが問題になった。幕府は調査した上で、結果、川上への荷船運送は自由であるとしてこれを認めた。そして、享保8年（1723）、幕命によって大石田川船独占の請負が廃止となり、上郷請負差配役制が成立した。（[2] p.124）「このことは幕府が、上郷商人の川船差配請負によって、城米運賃引下げの外、水運統制の強化を期待したからであることは言うまでもないが、上郷における商品流通の発達と、在方商人の成長に対

応した積極策として注目すべきことであろう。」([2] p.125) この上郷請負差配役制はその後の最上川舟運送の定法として効力を持った点で、最上川水運史上画期的な改革であったと言うことができる。([2] p.127)

### 3) 「商人たちの湊町」酒田 ([8] より抜粋)

#### <酒田の発祥>

酒田のまちは、古くは向酒田（むこうさかた）といい、袖の浦（宮野浦）あたりに町があったという。藤原秀衡も妻（もしくは妹）で平泉より落ち延びてきたといわれる徳尼公（徳姫）とその遺臣 36 人がこの地にやってきたことが酒田発祥の由来と伝えられている。徳尼公亡き後、36 人の遺臣は向酒田の地侍となって、船問屋を家業とし、自らを「長人（おとな）」または「三十六人衆」称して町政を担当したといわれている。室町時代ころにはすでに泉州堺や播州などと海船による物資の交流があったが、最上川の流路の変化とともに、袖の浦は船着場としての条件が悪くなった。そのため、船着場とし便利の良い、最上川北岸つまり当酒田（とうさかた）、現在の酒田への移転が三十六人衆によって計画されたと言われる。

#### <商業の発展>

三十六人衆は向酒田時代から船問屋を営んでいたといわれるが、室町時代から戦国時代にかけて、豪商たちは自らも船を持って交易を行っていたと伝えられる。

河村瑞賢によって西廻り航路が整備されると、酒田の町は飛躍的に発展した。当時の酒田への主な移入品は、播磨の塩、大坂や伊勢の木綿、津軽や秋田の材木、松前の干物などであった。最上川からは内陸の藩の年貢米、大豆などが入ってきたが、これらは酒田湊から登り荷として上方に運ばれた。

酒田の町の商人たちは、内陸の藩の年貢米などを保管する宿をしたり、集まった物資を売る問屋などの商いを営んだ。このころになると、海船を持つものは少なくなり、北前船や松前からの船を相手にして、仲買いや蔵敷料（保管料）、売買の際の保証口銭（手数料）などを主な収入とする廻船問屋が大きな勢力を持った。

天和 3 年（1683）には毎月 300 艘以上の船の出入りがあったといい、このころの一年の入船平均は約 2500～3000 艘にも達して、酒田の湊は繁栄の絶頂を迎えた。

#### <問屋の活動>

春になり、北前船が酒田に入湊する時期になると、廻船問屋の小僧たちは日和山に登り、客船帳で覚えた取引先の帆印を見つけると、店の主人に来船を報告した。主人は羽織袴に酒樽などを携えて、船上で船頭と入船祝いを行ったという。

酒田の商売の中心となったのは、問屋仲間の活動であった。問屋は多くの資本と倉庫を持ち、

他国の商人を宿泊させて、約1%の商品の蔵敷料（保管料）と、商取引の際に保証人となって一定の額の売買口銭（手数料）を徴収していた。

大問屋は主に上方からの下り荷物を取り扱ったが、松前や最上川筋とも取引していた。本町のほか中町・秋田町・獺師町に大きな屋敷を構え、その裏地や新井田川岸に多くの土蔵を持っていた。大問屋のほとんどが三十六人衆であり、しだいに三十六人衆は廻船問屋の株仲間の性格を濃くしていった。

小問屋は諸国小船の荷物と最上川を下ってくる荷物を取り扱ったり、海船の船員や最上川や赤川を下ってくる船頭衆、飛島や吹浦などの近海からくる船頭たちの宿となったりした。

#### 4) 「舟人馬かた鎧屋の庭」

慶長13年(1608)山形藩主最上義光から鎧屋の屋号を与えられた鎧屋惣左衛門(本姓は池田)は、日本海側での代表的港町酒田の大廻船問屋で江戸時代を通して繁栄した。また、酒田三十六人衆の一員として町政にも大きな役割を果たした。鎧屋の繁盛ぶりは、貞享5年(1688)に出版された井原西鶴の「日本永代蔵」にも紹介されている。現在の家屋は弘化2年(1845)の火災後に再建されたものである(「旧鎧屋の屋内展示板」より)。鎧屋は江戸時代の初めから廻船問屋として活躍し、山形藩や米沢藩などの蔵宿も勤めている。店と主屋からなる現状の建物は、主に商談の場として使用され、米や商品等は敷地内や河岸近くの蔵に保管された(「旧鎧屋の屋外展示板」より)。往時の屋敷地は本町通りから大工町通りまでを占め、明暦2年の大火後の町割りでは松原道で二分された(「旧鎧屋しおり」より)。

建物の特徴は、石置杉皮葺の屋根でこの地域の典型的な町屋造りである。家屋の中に入ると、「通り庭」(土間)が奥まで貫きそれに面して10間余りの座敷が並んでいる。一番奥の板の間と土間は大きな台所となっている。たしかに表通りに面した座敷は帳場もあり商家の趣きはあがるが、その奥は大勢の客を泊める宿の雰囲気である。物を運んできた船頭や馬方、それを売買する商人たちが遠方から集まり、寝泊まりしながら商談を進める。契約がまとまると、その取引額に応じて鎧屋は保証人として口銭を取る。荷物の保管料(倉敷料)は取るが宿泊代は取らない(旧鎧屋での聞き取りによる)。自分で買い付けて売値との間の鞘を抜くわけではないので、相場を張って大儲けすることはないが、地味で着実な商売である。

全国津々浦々から商人あるいはその手代が入替わり立ち替わり集まってくるのだから、交わされる話は訛りも混じり地方の話題も混じりで面白いに違いない。しかも、集まってくるのは商いの責任者、ひとかどの人物たちである。個性も様々である。

西鶴の『日本永代蔵』巻二の五に、鎧屋のそんな様子が描かれている。タイトルの「舟人馬かた鎧屋の庭」の「庭」とは、入り口から家の奥まで続く土間のことである。食事部屋につな

がる土間でいろんな人と出会い、挨拶をし、会話が生まれる。商人たちのその賑わいの中に、西鶴は「商才とは何か」そのヒントを探る。

この鎧屋の話の挿し絵に描かれているのは、多勢が忙しそうに働く台所とそれに隣接する食事部屋である。飯を炊く竈と釜も巨大なら、魚を焼く炉も巨大である。料理を作るのは皆、禪姿の男たちである。着物姿の女性もいるが助手である。座敷には配膳役の女性が何人か描かれている。一人の杓（しゃく）が一人の客に対して配膳その他の世話をする。

『永代蔵』で面白いのは西鶴の人間を見る目の鋭さと評価基準の二面性（複眼的見方）である。「遠国へ商いに遣わす手代は、実直すぎる者はふさわしくない。何事も控え目にして、人に遅れて行動するので、利を得ることに疎いからだ。また、大胆で時に主人に損を掛けるほどの者は、一方では上手に商売して、先の失敗でできた借金の穴を埋めるのも早いものだ」（井原西鶴 [7] p.141）と言いながら、他方では鎧屋の着実な商いを高く評価している。どちらの評価も現実的で正しいのである。

旅から鎧屋に着くとすぐに着替え、おしゃれして、店のものに案内させて遊びに出かけるような者をこれまで何人も見てきたが一人として出世したような者はいない。使用人から独立してすぐに自分の店を持つような人は目の付け所が違うという。鎧屋に着くや否や主だった手代に近寄り、紅花の出来具合や青苧の相場を詳しく訊くのである。西鶴のこの記述で、商才に長けた人間の特徴がわかるだけでなく、紅花と青苧が商人にとってこの時代すでに重要な商品であったことが知れる。

#### 4. 青苧から木綿へ—商品経済進展のダイナミズム—

##### 1) 青苧とはなにか

律令時代における物納租税、庸・調の対象となった「布」は、木綿布の類だと私はずっと思っていた。調の解説として辞書に「諸国の産物（絹・綿・海産物など）を納めた」とあるのをみると、他の多くの人もそう思うのではないだろうか。だが、今回の酒田における調査を経て調べているうちに、それは間違いであることに気づいた。「漢語林」によると「綿」という漢字は、もともと繭から作る真綿（まわた）のことである。木綿を意味する漢字は本来「棉」と書く。それが現代では「綿」と書かれるようになったらしい。「綿花」は本来「棉花」なのである。

「広辞苑」の「調」の説明には、「繊維製品・海産物・鉱産物など土地の産物を徴収した。分量は、例えば麻布・栲布の場合に一人当たり2丈8尺」と例示の中に麻布・栲布が現れる。ただ、麻布と表現すると現代では大麻から作る麻布のイメージしかわからない。麻（大麻）は一年

生の栽培植物で畑に種をまいて育てるもので、その繊維は硬くて丈夫な特性を持つ。じつは、同じ麻という文字が含まれるが全く別の繊維から作られる布が存在する。「苧麻（ちょま）布」である。苧麻は「からむし」あるいは単に「苧（お）」ともいう。大麻とは全く別種で、列島各地に自生するイラクサ科の多年草である。やがて家の近くで栽培もされるようにはなるが、もともと色々な所に自生し手に入りやすい繊維原料である。苧の方が麻に比べて繊維はいくらか柔らかみがあり衣料の材料としては適している。麻も衣料原料として用いられなくはないが、魚網や包具、帆布、馬の鞋など耐久性が求められる場合にとりわけ用いられたであろう。

「青苧（あおそ）」とは苧麻から布にする途中の繊維を取り出すための中間製品である。それを束にした形のものが取引の対象となる。庸・調の対象となった「布」は絹織物や木綿ではなく、「苧麻布」である。ただ、「麻」という文字で苧麻を意味することもあったというから紛らわしい。以下、永原慶二氏の著作『苧麻・絹・木綿の社会史』[5]に寄りながら述べてみよう。（永原氏の著作では、苧麻布という表現の中に大麻から作る麻も含まれるが、衣料原料の主流は苧である。）

木綿は15世紀ごろまで列島にその栽培の姿をみることはなかったという。（[5] p.8）近代以前の日本の衣料原料で代表的なものは、苧麻・絹・木綿の三つであったが、戦国時代以前にはまだ木綿は導入されていないので、古代・中世では苧麻と絹であったということになる。（[5] p.2）律令国家が成立し、租・調・庸の税制が実施されると、中央に遠く、しかも海上交通がまだ積極的に活用されていなかった当時、東国の調・庸の品は、多く布と絹・綿（＝真綿）であった。「布」は織物一般ではなく、絹と区別された苧麻織物のことである。これらは軽量で運送に便利だったから「軽物（かるもの）」と呼ばれ、調・庸物の中心とされた。（[5] p.183）

律令国家においては、絹は支配層の権威と不可分の身分制的衣料としての性格を賦与され、「調」物の中核に位置づけられていたが、中央政府の支配層は畿内を王権の直属地という考えを取っていたため、その地域をかかれらの必要とする労働力（労役）や食糧の直接的供給地と位置づけ、物の面では米・麦以下の食料系産品に重点をおき、「調」物としての「布」は他の国々の半分だけを負担させ、「絹」は畿内には課さず、畿外諸国に賦課する規定であった。（[5] p.28）

とはいえ絹は律令制発足の当初から畿外の諸国から平均的に徴収できるというものではなかったという。「調」として収納する諸産品のうちもっとも重視していたのは絹織物であったが、それが不可能な場合は「布」を徴収していたという。東北地方では、8世紀終わりころでも養蚕・絹織物の生産はまだ調物に絹を出せる水準に達しておらず、「布」の生産が主流であった。（[5] p.29）

「東国五カ国の「調」は「元来是布也」といわれるように「布」が主流であった。絹あるい

は糸・綿という絹系の「調」を正丁（せいてい）の人数に応じて戸別に所定の長さを徴収することは現実にはどこでも不可能だったのであり、「調」「庸」物としては苧麻系の「布」の方が一般的であった。」（[5] p.31）

布も絹とともに中央政府の直接収取物であるため、規格の統一が厳しく要求されていたが、「現実には布の場合でもすべての正丁が個々に規定通りみな織布を行なっていたわけではない。まして自家用の布の場合は、半端な寸尺の布地が粗い織りで作られ、それらを継ぎ合わせて短衣を作るという状態であっただろう。」（[5] p.34）「苧麻は・・・一面では一般民衆の衣料原料の代表格であったが、かれらは多くの場合、短い寸尺の布を継ぎ合わせ、膝切りの状態の労働着を作って着るのであり、規格通りの「布」を着るのではない。寒い時でもそれらを重ね着しただけで」あった。（[5] p.86）

苧麻布は列島においてもっとも古くから用いられた衣料繊維であったと同時に、近世に至るまで日本人にとってもっとも普遍的で馴染みのある衣料材料であり続けたと思われる。「一般民衆の中でも苧麻系の間生産物としての青苧や布の生産が行われていたことは絹の場合との大きな相違である。とくに完成品としての「布」でなく、植物としての苧（お、からむし）から繊維を取り出して中間製品とした「青苧」を国側が徴収することもひろく行われている。」（[5] p.41）「植物としてのからむしを採集し青苧にするまでは、個々の現地住民にとっても比較的容易なことであったし、繊維束は輸送の面でも概して軽量で破損などのリスクも少なかった。・・・都市暮らしの庶民も中間製品としての青苧を手に入れ、暇ひまに糸を績むという自家作業を行っていたのである。その点は絹の場合と明確に異なるところであって、苧麻系繊維の広範囲な利用が可能となる条件」であった。（[5] p.42）

「14世紀、つまり鎌倉後期以降、苧麻布の代銭納が進むとともに、特産地は別として多くの土地では織布を行わず、青苧の形で出荷するのが主流になっていった。その動きは西国方面でも広く見られた。さらに15～6世紀には古くからの主産地として中央の評価も高かった越後や越中・信濃の布は高級商品としての需要が拡大し、中央支配層の贈答品などにも広く用いられている。」（[5] p.74）「それらの地方からは青苧の形で中央地帯に送られてくるものも莫大な量に達していた。近江や奈良の布・・・は戦国時代に発展の基礎を築き、江戸時代に飛躍を遂げたが、それは移入した青苧で高級織物を織り出すのである。」（[5] p.86）

かくして、苧麻系織物は中間製品である青苧が商品化することによって、高級品に特化した地域的専門化も進んでいった。「京都の白布座、奈良南市の布座、天王寺今宮の布座などは、みな商人座であるが、おそらくその傘下に多くの織布生産者を持っていたであろう。商人たちは仕入れてきた青苧を傘下の住民たちに委ねて、績み、織らせたのである。住民の側からすれば価格の決定権はないが、ともかくも農家副業として、貨幣収入の源泉とすることができた。」（[5]

p.198)

高級品の条件としては「晒し」の技術が重要であった。「奈良晒」という言葉がよく示すように、織りあげた布を晒して漂白する技術の点で奈良はとくに優れていた。青苧を績み、織ったものそのままでは、茶褐色で染色もうまくゆかない。奈良晒は近世に入ってとくに盛んになり名を挙げた。越後上布は独特の雪晒によって漂白されることで有名になった。([5] p.198)

ただ、使用する側から見た苧麻布の特性や機能、さらにはそれを作る側から見た苧麻布の生産過程には、もともと大きな課題があった。とくに戦国期以降急速に普及した木綿と比較した時にそれは明らかになってくる。

苧麻布は、大麻から作る麻布に比べれば幾分柔らかさがあるとはいえ、木綿に比べると柔らかさ、肌触り、保温性の面では格段に劣る。しかも染色が難しい。また、奈良晒や越後上布が珍重されたということはその漂白技術が容易ではないということの裏返しである。それは衣料繊維として大きな弱点である。染めの効果が上がるには地が白くなくてはならない。また苧麻は繊維が固く染料が浸透しにくい。洗っても落ちないようにすることが難しい。

「古代・中世の苧麻布の時代には、江戸時代の民衆の日常衣料の染色材料では決定的な重みを持った藍が、存在はしていてもまだそれほど絶対的な地位を勝ち得ていないこと、室町時代には藍の使用がかなりふえてくるが、それはむしろ支配層や都市の需要に対応するもので、民衆衣料の染色は天然の多様な草木染めに依存するのが普通だった。・・・古代・中世の民衆が苧麻布に出せた色は、主として自給材料によって限られており、それも鮮明で濃い色合いは出せず、ボケた感じの染色で満足しなくてはならなかったと思われる。・・・多様な色合いが、にわかに民衆に近づいてくるのは、木綿の時代を待たなければならなかったのである。このことは、麻の時代には自給的染料の比重が高かったのに対し、木綿の時代になると染料も商品化するということでもある。」([5] p.214-215)

さらに課題が大きいのは苧麻布の生産プロセスである。原料となる青苧づくりは、運搬の負担の面からも、また苧を刈り入れた後、その場ですぐに行わなければならない素材の性質上からも、栽培から分離して別工程の分業とすることができなかった。また、青苧から糸を績む「苧績み(おうみ)」という作業も、青苧を一茎ごとにバラして、湯で煮て柔らかくし、平らに広げ、爪を使って細かく裂き割り、指で撚り、口に含んで湿らしながら繊維をつないで糸にする。木綿を紡ぐ場合のように糸車を使って糸を早い速度で引き出すようには行かず、繊維は手でつなぐのだから能率はきわめて悪い。そして苧麻布の織りに使う織り機はイザリ機でもっとも原始的なタイプである。手ばかりでなく、足を使い、体・腰を前後に動かして経糸の張力を調整しつつ織るという厳しい作業を要する。スピードを上げることは難しい。

「苧麻布の生産が、白布の場合でも、きわめて能率の悪い、女性たちにとっては過酷な労働

と長時間の忍耐を要求される作業であって、秋から冬を過ごし春になるまで織り続けても、やはりせいぜい3~4反程度でそれを越えることが容易でなかった」であろう。([5] p.210)のちに木綿が導入されると、瞬く間に苧麻が木綿に取って代わられる最大の理由がここにあると永原氏は強調する。

## 2) 木綿の登場

日本の木綿栽培は799年、三河から始まったとよく言われるが、実際はこの時伝来した木綿種子は日本のどこにも根付かなかった。日本人が木綿布を知り、その魅力に強く惹きつけられていったのは、14世紀末から15世紀にかけてのころであった。中国や朝鮮から送られてきた舶来製品としてである。

じつは朝鮮も元々苧麻の国であった。朝鮮に木綿の種子が伝来したのは、14世紀後半の高麗朝末期だという。朝鮮王朝が成立した14世紀末には、朝鮮の木綿は本格的な展開期に入り出していた。15世紀初期の時点では、木綿は朝鮮でもまだ貴重な産物であったという。([5] pp.218-220)

「中国においても、木綿栽培が本格的な発展期に入るのは、14世紀末から15世紀初葉の明初のころであった。そのきっかけとなったのは、中国が全土統一される直前、1365年に早くも実施した明の太祖洪武帝の木綿栽培奨励であった。」([5] pp.222-223)

日本における木綿栽培は戦国織豊期に各地に展開したとみられる。([5] p.260)「西は九州から東は関東に至るまで、おそらくほとんどの地域で、江戸時代以前に木綿栽培・木綿織は展開していた。しかし、さすがに東北地方への展開は困難であった。」([5] p.259)

北陸・東北方面で綿作が立ち遅れていたことは事実だが、木綿の栽培の開始と広まりを江戸前期中心に見る通説的理解は訂正される必要があると永原氏は主張する。実際はそれよりも早く、16世紀中に展開していたと言う。「木綿生産は戦国時代から江戸時代初期にかけて、爆発的な発展を遂げた。・・・苧麻に比べて木綿の方が、栽培・紡績・織布の全生産工程を通じてその過程に分業が成立しやすく、経済性に優れ、商品生産・流通の面で発展的性格を備えていたからである。」([5] p.304) 木綿の場合には、苧麻と違って、国内栽培開始後早くから商品的性格が濃かったという。

「苧麻の場合は、古代では、自家消費分を除いて、流通市場に放出されるものは、一旦調・庸や交易雑物(商布(タニ・しょうふ))として国家の手に収取されたものが大部分であった。中世においても、調・庸・雑物が年貢や在家役という荘園制的収取に変わったが、生産者農民の手から、わずかながらでも直接地方市場に売り出される形が見られるのは、鎌倉期以降であった。」([5] p.262)

「室町・戦国期に入ると、中央地帯における奈良晒のような技術的發展をバネに、中央商人が越後など、特定の苧麻生産地から、青苧という中間商品や苧麻布を多量に買い入れる、という形が拡大したが、その流通量はのちの木綿と比べるとまだまだ小さかったと思われる。・・・苧麻の紡織・織布の生産能率の低さが、大量生産を不可能としていたし。農村では全国的に自家生産が行われていたから、次第に発達しはじめた都市を含めても、商品市場は概して狭かったのである。」〔5〕 p.262

「木綿の場合は、・・・商品流通にかかわる性質のものが高い比重を占めている。木綿織物が年貢として支配層の手に直接現物で収取されるという形は、まったくといってよいほど見られない。木綿は大名領国の領内領外に商品として流通し、大名はそれに対して木綿役のような形で役銭を賦課しているのである。あるいは領国経済政策の観点から、領外移出をコントロールしたり、円滑な取引のために様々な規格を設定したりしているが、その前提は一旦年貢となったものの流通ではなく、直接の生産者をはじめとする現地の人々の手から商品として流通市場に投入されたものであった。」〔5〕 p.263

室町時代、貴族や僧侶に珍重され、貴重品並みの扱いを受けていた朝鮮・中国からの輸入木綿であるが、戦国時代に入ると、国内木綿栽培の開始によって、兵衣・帆布・火縄・陣幕・旗幟・馬衣など軍需品の分野、さらには袴など武士の日常衣料にも木綿の用途は広がっていった。そしてもちろん庶民の日常衣料に広く使われるようになる。このように16世紀以来木綿の需要が爆発的に拡大したのを受け、木綿生産は急速にそれに対応せざるを得なかった。そうした条件のなかで全国的な綿作の広まりが現れてきたのであるが、木綿が民衆衣料原料として普及してくるに応じて価格の低廉さも要求されるようになる。それにつれ、主産地の地域的集中が進行してくる。17世紀（江戸前期）において、綿作・綿織物の主産地は三河・尾張・伊勢など畿内とその周辺地域に集中する傾向を示す。

### 3) 木綿生産の専門化・分業化・集中化

木綿と苧麻との違いは栽培の段階からある。「苧麻は人糞や馬糞などの自給肥料のほかは一番芽を焼くだけであって、購入肥料はまったく用いない。除草・中耕も密植するので行わない。こうした点で苧麻の植栽は中世的な粗放経営に適合しているのに対し、木綿は近世の労働集約型の小農経営に適合的であり、多量の干鰯・油槽など購入肥料を投入できるのも、木綿が商品生産として利潤追求型の作物だったからである。」〔5〕 p.308 灌水など周密な農作業を施す工夫や技術によって、また種子の種類を選択によっても収量は大きく変わってくる。

畿内では水田を「半田」（搔揚田）として綿作に利用した。1643年（寛永20）に水田への綿作付が禁止されるのであるが、畿内における「半田」型水田利用が爆発的に広まった証拠であ

る。この禁止令は誰も従わず、効果がなかったという。([5] p.325)

「中世後期を通じて肥培・管理技術を他地域に先んじて発展させ、集約的小経営の進展が見られた畿内農民こそ、多肥的経営の典型である木綿作の担い手としてもっとも適合的な技術条件を持っていた。干鰯・油槽のような購入肥料の供給も、堺・尼崎・大坂など畿内の主要港津に向けて産地から集中的に送り込まれてくる。畿内農村では、中世後期を通じて野菜や油・酢・素麺・麴などをはじめとする農産物・農産加工品の生産・販売が行われるようになっていたから貨幣獲得の機会にも恵まれ、金肥の購入にも抵抗が少なかったに違いない。」([5] p.327-328)

また、綿業諸工程は、綿花作り(実綿)→繰綿→総糸→織布の順序をたどるが、畿内ではこれらのプロセスが専門的に分業で行われていた。「木綿作地帯と織布地帯は摂津・河内・和泉では国内で明瞭に地域を異にしているのである。紀伊・淡路は総糸だけを出荷しているが、これは畿内の繰綿を購入して総糸生産をもっぱら行う地帯であり、畿内綿作地帯とのあいだの地域的分業なのである。その他「木綿(実綿)」を出荷せず「白毛綿」だけを出荷する国々は、その国で木綿作が行われず、繰綿あるいは総糸を大坂から購入して木綿織物生産だけを行なっているのである。」([5] p.328)

摂津・河内・和泉のように諸工程の地域的分化・社会分業が進展している地帯こそ、木綿作そのものも高度化していると見ることができると永原氏は言う。

また東北地方のように、木綿栽培が気象的条件で不可能な地域でも、繰綿を仕入れて、総糸作り・織布を行うという形が広く展開した。最上川を上流に向かう舟で繰綿が運ばれていたのも、このような木綿特有の分業体系が背景にあったのである。木綿は本来的に商品経済化を進めやすい衣料繊維であったということがわかる。

苧麻布の場合にも「越後布」や「奈良晒」のように高度な晒技術として専門化していくプロセスがみられたが、木綿についても晒の技術それ自体が分業化し、産地を特徴付けることになる。「伊勢木綿は、・・・はやいころには特に晒技術に優れ、その面で高い評価を得ていた。知多木綿は、その点で伊勢に劣っていたため、はじめは大野から伊勢側の白子(しろこ、現鈴鹿市)」に廻送し、そこで晒して伊勢木綿の名で江戸に送るという形をとることが多かった。白子は江戸の木綿問屋が、大伝馬町組と白子組に分かれたことからわかるように、尾張・伊勢木綿織物の中心的積出港であった。」([5] p.297) その後、知多の木綿産地は独自に晒加工を行える技術を伊勢から学びとり、江戸中期以降「知多晒」としてその名声を高めることになる。

「伊勢木綿は、江戸初期から商品化の度合いが高く、とくに寛永以降、松坂商人が木綿を取り扱って江戸に進出し、大伝馬町への出店がさかんになったこと、またそのころから元禄頃までに、すなわち17世紀後半には、伊勢木綿の流通機構も整備されていったことなどがほぼ明らかである。」([5] p.298)

木綿製品の全国的な普及・木綿生産力の増大とともに、製品の質の高まりや流通機構の整備などが一体化して進み、木綿は江戸時代の商品経済化を進展させる主人公としておどり出る。

#### 4) 木綿の普及がもたらす商品経済化のダイナミズム

新たな繊維として木綿が登場してくることによって、近世の経済は一気に商品経済化を進めていく。

##### (1) 魚肥の市場の拡大

近世の房総半島太平洋沿岸地域は、鰯を原料とする魚肥（干鰯）の代表的な生産地域であったが、それは畿内の綿作の発展による魚肥の需要増大を背景として、近世初頭に始まる関西漁民の関東出漁によって開始されたものであったという。（古田悦造 [3] p.19）

「ここで生産された干鰯・メ粕は大坂資本を基盤とした相模国三浦郡東浦賀村に立地した魚肥問屋を通して関西方面に出荷されていた。この関西漁民の出漁に伴い関東地方へは、砂浜海岸に適した地引網と岩石海岸に適した八手網との二つの漁業技術が伝播した。前者の地引網は、元禄期以降その技術を片地引網から大型の両地引網に転換され、それに必要とされる資本も多額なものとなった。この技術変革は、新田開発にともなう魚肥需要の増加や水田への北関東地方における魚肥投下を背景としつつ、多額な資本を基盤とした江戸の魚肥問屋の介入を促進した。このため、東浦和の魚肥問屋は地引網の魚肥生産地域の集荷地を喪失させるに至った。特に、上総国の太平洋岸以北で生産された魚肥は、江戸の魚肥問屋や下総国関宿・常陸国境に立地した魚肥問屋を流通拠点として、北関東地方に出荷されていた。浦賀の魚肥問屋は集荷地が縮小したものの、八手網を主たる生産手段とした外房漁村のうち、関西漁民の出漁地で生産された魚肥の集荷を確保し、尾張国や三河国の綿作地帯および相模国における魚肥使用の農村に出荷することによって存続した。

房総半島太平洋沿岸におけるいわし漁業の不漁および関東地方における魚肥使用の導入や江戸などの魚肥問屋の魚肥生産地域への進出は、関西方面への魚肥流入の低下となって現れた。」

（[3] pp.19-20）このような関東地方からの魚肥移入の困難化から他の魚肥生産地域にその集荷地を求めることになった。それが蝦夷地の鯨であった。その鯨を近畿地方に運ぶのに北前船が活躍したのである。

近江国における魚肥利用からもそれは裏付けられる。

「近江国への魚肥流通経路は伊勢湾西岸の四日市や白子および大坂からの流入を主流としたものが、近世中期以降になると、主として敦賀を経由して流入していた。」（[3] pp.23-24）流入ルートの変化は、魚肥の種類が関東の干鰯から松前の胴鯨・鯨メ粕へ変化したということであり、運ぶ廻船が変わったということでもある。

大坂から江戸への荷物を取り扱う菱垣廻船は有名であるが、木綿関係商品を主要な荷物とする廻船も独自に発展していた。四日市や白子は、伊勢の木綿製品を江戸に運ぶ廻船が利用した拠点港である。その帰り荷の中の有力な一商品が干鰯であった。(永原 [5] p.339) 近江国も近世中期ごろまでは、魚肥として関東からの干鰯が使われていたが、中期以降、蝦夷からの鯨魚肥が多くを占めるようになる。(古田 [3] IV) つまり、近江国の魚肥も北前船が運ぶようになったのである。

近江国の魚肥利用に関するこの論文の中で、面白い指摘がある。農村地域において使用される肥料は、平野農村において金肥の投下が見られ、山間農村においては草肥など自給肥料の使用が一般的とされるが、このような通説に対して近江国南部地域で異なった魚肥投下の状況が見られるという。つまり山間農村においても魚肥が多量に投入されているというのである。問題は何を栽培しているかということである。それは、茶である。

「湖東平野殊に山麓農村における魚肥導入と(鯨魚肥への)転換は、水田や畑作へ即効性の元肥料として使用されるとともに、北陸方面を主たる市場とした茶生産への投下が卓越していた。また、鰯肥料と鯨肥料との成分を比較すれば、窒素分の組成がおおの 8.49%、10.36%、リン酸分が 6.56%と 5.06%で、茶や煙草など葉の育成にとって重要である窒素分の含有量は鯨肥料が有効である。この点も、肥料の効率性から有益であり、農民にとって鯨肥料への転換が容易に受容されたのである」([3] p.34) と結論づける。

木綿の普及と生産拡大は、魚肥の需要を増大させ、新たな供給源(蝦夷の鯨)の開発を促し、北前船という新たな輸送ルートの確立を見た。それを最終的なユーザーである農民に円滑に届けるために、各地で魚肥問屋とその組合組織を密度高く広範囲に浸透させることにもなる。流通量の拡大と流通組織の整備とは一体的に進む。かくして魚肥という大型商品の成立に至る。

魚肥の有効性が分かりその入手が容易な環境ができると、今度は新たな土地や作物への利用を考え、それを試みるようになる。その一例が、湖東山麓地域の茶の生産であった。そして、それも加賀などの北陸地方への販路が定着し、一つの商品としての確立を見たのである。

## (2) 染料としての藍・紅花の需要の増大

木綿の導入は、紡績・織布の生産性の高さゆえに庶民の衣料消費が伸びて、木綿需要が促進されるとともに、染料としての藍、紅花の需要もそれにつれて高まるのは当然であった。とりわけ木綿は苧麻と比べ染めが容易な特徴を持つ。色が鮮やかに出るのである。こうした動向の中で紅花の産地として羽州、藍の主産地として阿波が発展する。

藍の生産工程にも分業が進められた。まず、「葉藍(はあい)」の栽培である。ここでも魚肥の投入が重要な役割を果たす。「(鯨)×粕の大量輸送が阿波の藍を育てた」という。(牧野 [1] p.48) 収穫した葉藍は刻んだ上で乾燥させる。それが「藍師(あいし)」に売り渡される。藍師

はそれを発酵させ「菜（すくも）」に加工する。この工程は最低3ヶ月を要し、その間細心の注意と専門的技術を必要とする。次は、この菜を溶解し、再び発酵させ、実際に糸や布地を染める工程である。阿波から、各地に売り出された菜を使って「紺屋（こうや）」が担当する工程である。この工程も専門知識を必要とする。重要なのは、「このように「菜」が各地の紺屋に渡って、最終工程としての染色が行われるためには、生産地の「藍師」によって作られた「菜」が、藍商人の手元で買い集められ、これが大坂・江戸などの藍問屋に送り出される流通機構が整備される必要があった」ということである。（永原慶二 [5] p.325）

阿波の場合、1673年（寛文13）にはすでに大坂藍問屋が出現しており、その後江戸問屋も公認され、大坂売り、江戸売りの体制が整えられていく。阿波藩はこの問屋商人に販売独占の特権を与え、その代わり歩一税（ぶいちぜい）とよぶ取引税を課徴することによって藩財政を潤そうとした。（[5] p.326）

### （3）古手の役割

古手（ふるて）は木綿製品の古着のことであるが、江戸時代の都市部から農村向け商品の代表的なものの一つであった。そのまま古着として着たり、生地を細かく裂いて、それを緯糸がわりに用いて織る厚手の布地として使う。日常の帯などはこのような形で作ったのである。「それまで自給衣料としての苧麻や「綿（絹綿）」だけに頼っていた東北地方にも商品としての木綿が流入し始めたことを意味している。・・・都市民衆ばかりでなく、地理的事情で木綿生産から締め出されていた農民にも、古手という二次的な形にせよ、木綿商品の購入者という性格を帯びざるを得なかったところに、商品としての木綿の影響力の大きさがあるのである。」（[5] p.323）木綿は製品としても美しく仕上げられるが、リサイクルにも耐えるほど丈夫で長く利用価値を持つ繊維であった。

### （4）「男はわら仕事、女は木綿」

木綿の普及とともに商品経済化が進むと、夜なべや農閑期の仕事に「男はわら仕事、女は木綿」という副業労働が広く行われるようになる。苧麻の時代に紡織労働に割かざるを得なかった時間の負担は軽減されるのでなおさらである。夜なべ仕事には明かりが必要である。菜種は江戸時代では、中世の荏胡麻に代わる灯油原料として広く作付けされるようになる。それに呼応するように絞油業も発達する。その需要の中心はもちろん大坂を中心とする都市であり、ここでは庶民の家でももはや灯油を使わない生活は無くなっていた。菜種は都市生活の発達を示す指標的な産品と言っていい。さらには、菜種油は木綿織物生産地などの農村でも使われるようになっていった。夜なべ仕事を日々の生活日課の中に取り込み位置付けるようになったのである。（[5] p.344）この時期の夜なべ仕事は、必要に迫られて自給品を作るというのではなく、貨幣収入を目的とした仕事である。木綿の導入がそれを可能とした。かくして菜種油は大きな

市場を持つ商品へ変貌する。

### (5) 廻船業の発達

尾州、勢州木綿の主要な積み出し港は伊勢の白子であり、三河木綿は高浜や平坂であった。大坂から江戸への送り荷を取り扱う菱垣廻船などばかりではなく、伊勢・三河などから江戸に向けて、木綿関係商品を主要な積荷とする廻船もまた独自に発展したのであり、それらの帰り荷の中の有力な商品が干鯛であった。

室町～戦国時代に、大鋸引き、船番匠の専門化が進み、船の大型化が進む。300石以上から1000石積を超える大型船が増加し、木綿帆による帆走を主力とする外洋航行に移行し、船足も向上した。経済発展に欠かせない輸送力の飛躍的向上を意味しており、ここに戦国から江戸にわたる時代がそれ以前と区別される有力な条件があった。

「木綿関係商品は、江戸の消費にとどまらず、関東・東北の需要部分を含め、大坂から江戸へ送られる必要があり、これが廻船業の発展を強く促進する有力な原因となった。その意味で、綿業の発展は、流通面まで含め、商品経済のスケールを急速に拡大する役割を果たした」([5] p.339)

西廻り航路を蝦夷まで伸ばした（あるいは荷所船が西廻り航路とつながったというべきか）北前船は、瀬戸内の塩、近畿の木綿を蝦夷や東北に運び、蝦夷で獲れた魚肥を西国や近畿に運んだ。北前船は弁才船とも呼ばれたが、この時代を代表する大型船である。まさに、全国的な商品経済の大動脈の役割を果たしたのである。菱垣廻船や樽廻船は大坂と江戸を結ぶ主要なパイプであったが、運送だけを請け負う運賃積み経営であった。それに対し、北前船は寄港する各地で特産品を仕入れ、また別の地でそれを売るという買積経営であった。したがって船の形はスピードよりも多種類の荷物を大量に積み込むことが優先され、外見はずんぐりとして丸みがある。

運送業に携わりながら、北前船のビジネスの本分は売りと買いの鞘をいかに稼ぐかにある。このような買積商法は近江商人の「持下り商法」に学んだものといわれる。「近江商人は天秤棒で担いで自国の品物を隣国に売り、その金でまた違った隣国の品物を仕入れ、それを次の土地で売る、そうしたことを繰り返して蝦夷地に達した。近江商人こそ北前船主経営の師であったのであろう。」(牧野隆信 [1] p.41) 北前船は今日言うところの「企業家精神」を發揮させる重要な舞台であったのかもしれない。木綿の普及をきっかけに生じてきた商機（価格の地域差や不均衡）を、運送力を武器に掴んだのである。

### (6) 最上川流域と商品経済化

木綿の登場は衣料繊維の主役を苧麻から奪い取ったが、苧麻や麻が消えたわけではない。麻は夏の衣料として、裃のような武家の礼服として、また蚊帳や綱のような生活用品の材料とし

でも依然として用いられている。苧麻も自給的衣料原料としての性格から脱皮し、近世に入って商品生産として新たに発展し始めたと言えよう。越後の青苧生産はやがて衰退するが、最上川流域の青苧生産は高級布の原料供給地として生き残ったのである。

置賜地方の米沢苧麻（からむし）は上杉藩の奨励もあって江戸時代前期に盛んとなり、この地方の青苧は、主として奈良に送られ、「奈良晒」の原料に当てられるようになった。（[5]p.347）江戸時代には青苧の生産もその性質を商品生産の方向に大きく転換させたのである。

だから、小鵜飼舟に乗せられて最上川を下る重要な特産物となったのであり、西鶴の『永代蔵』に描かれたように、その相場は酒田の鎧屋に集まってくる商人たちの強い関心を引いたのである。

「江戸時代の東北地方というと、水稻単作の年貢・小作料の負担の重い農家経営ばかりをイメージしがちであるが、現実には農民も藩も、自然条件の制約に由来する不利な面を、このような特定商品の商品生産・販売の推進によって打開しようとする動きを、早くから推し進めていたのである。村山地方で青苧と並んで知られる有力商品であった紅花も、同じ流れの中で発展していったのである。」（永原慶二 [5] p.347）

このようなこの地方なりの商品経済への対応があつてはじめて、繰り綿を買って木綿織物生産を行ったり、古手にもせよ木綿製品を購入することができたのである。木綿の商品化は、それが地理的条件として不可能だった東北地方にも、商品経済への強いインパクトをもたらしたといえよう。（[5] p.348）

木綿の国内栽培の開始とその普及は、民衆の衣生活を一変させただけではない。「木綿の導入が日本の社会・経済の全体にもたらしたインパクトとしては、連鎖的に商品経済を進展させ、経済社会のあり方そのものを大きく構造的に転換させたことこそ、決定的に重要だと考えられるのである。」（[5] p.345）

小鵜飼舟に乗せられ最上川を上り下りした木綿と青苧とは、江戸時代の商品経済化の進展を物語る象徴的な産物だったのである。「青苧から木綿へ」の衣料原料の転換という「事件」が、近世の商品経済発展のドラマを生み出した要因であったと言えるが、最上川流域の青苧は自給衣料原料としてではなく、高級布の原料として新たな商品化を遂げた。また木綿の普及が、この地域の特産物である紅花という染料の大型商品化をも促したのである。

## <エピローグ>

今回の北前船調査の私にとってのキーポイントとなったのは、酒田の山居倉庫のそばに復元してある小鵜飼舟であった。それに乗せられて最上川を下った荷物の一つとして青苧があった。

青苧って何だろうという疑問（自分の無知）からスタートして調べていくうちに、とんでもない歴史がそこに潜んでいることがわかった。川を下る青苧と上る木綿とが、ここまで因縁の深い産物であるとは思ってもよらなかった。最上川を上り下りする小鵜飼舟のイメージは、流域のどかな田園風景を連想させるのであるが、その舟に乗せられた品物の一つひとつには、江戸時代に商品経済化がダイナミックに進展していたプロセスの一断面が垣間見られるのである。また流域の河岸では、それら商品運送の主導権をめぐる商人達のはげしく競い合っていたのである。

北前船の役割を探るつもり酒田での調査が思わぬ発見につながったという感慨がある。特に、永原慶二氏の二つの著作、『新・木綿以前のこと』と『苧麻・絹・木綿の社会史』との出会いは私にとって衝撃的であった。苧麻に代わる木綿の普及が江戸時代初期の商品経済化を大きくつき動かしたという見方は、新鮮な響きがあると同時にきわめて説得的であった。

じつは永原氏は私が学生時代に日本経済史を学んだ教授である。当時気鋭の学者でもあり、理論的な語り口に魅力を感じてはいたが、苧麻から木綿への話は記憶にない。おそらく、晩年に近づいてからの問題意識であろう。衣料あるいは衣料原料の歴史は、「従来重点が服飾史や染織史に傾き、問題の広さに対して、視野は十分にゆきわたっていなかったように思われる」と述懐されている。1990年に出版された『新・木綿以前のこと』は「苧麻から木綿へ」という副題がつけられていた。その後の研究で修正点や増補の必要を感じられ、『苧麻・絹・木綿の社会史』の執筆に取り掛かれる。しかしその完成間際に病魔に襲われ、初校を終えた段階で亡くなられた。あとがきは夫人が書かれている。おそらく夫人は永原氏の問題意識を常々聞かされ共鳴し、応援もされていたのだろう。そのようなことが、何となくあとがきから伺えるのである。今回の北前船調査の延長線上で、学生時代に接したことのある教授が晩年心血を注いで書かれた著作に出会い、感動・共鳴することができたのは幸運でもあり、感慨深い経験であった。

#### <文献・資料>

- [1] 牧野隆信『北前船の時代』1979年 教育社
- [2] 横山昭男『近世河川水運史の研究』1980年 吉川弘文館
- [3] 古田悦造「近世近江国における魚肥の魚種転換と流通構造」『人文地理』第42巻 第5号（1990）
- [4] 永原慶二『新・木綿以前のこと』中公新書 1990年
- [5] 永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館 2004年

- [6] 中西聡『北前船の近代史—海の豪商たちが遺したもの—』（改訂増補版）2017年 成山堂書店
- [7] 井原西鶴『日本永代蔵』矢野公和・有働裕・染谷智幸訳 講談社学術文庫 2018年
- [8] 「商人たちの湊町」酒田市立資料館 第183回企画展（2013）の解説パネル
- [9] 酒田市資料館展示
- [10] 最上川電子大事典
- [11] 大石田町公式ウェブサイト「おいしいものがたり」
- [12] ブリタニカ国際大百科事典